

第1回 到津の森公園将来ビジョン検討会議 議事録

- 1 開催日時 令和5年8月22日（火） 13時30分から15時30分
- 2 開催場所 到津の森公園 管理センター3階会議室（北九州市小倉北区上到津4-1-8）
- 3 出席者 南 博（座長）、岩谷 かおり、西田 貴史、野田 亜矢子、村上 嗣英、宗野 智子（代理出席）
- 4 会議概要
 - （1）到津の森公園の現地視察
 - （2）議題「到津の森公園の現状」「4つの基本方針に関する総括について」に対し意見交換
 - （3）到津の森公園への思い入れや園内を視察した感想などを自由討議
- 5 会議経過（発言内容）
 - 動物園にもいろいろ関心を持っており、いろいろなタイプの動物に触れることができる、見ることができる施設というのを1ユーザーの目線で関心を持たせていただいている。
 - 到津の森公園の強みを今の時点で考えると、子育て世代にも優しいということ。広すぎず、高低差が適度でアップダウンがあり過ぎない、何より交通の便も非常に良いところだと思う。一方、課題としては市街地にあり、敷地の制約があるということは、あり方を考えていく上での課題でもある。
 - 到津の森公園に来るのは動物を見に来るというイメージであったが、ここのボランティアをされている方に誘われて見に行ったら、動物を見に来る以外にも楽しみ方があると知って良いと思った。
 - おそらく目指しているのは利用者を増やすことだと思うが、日本は動物園や水族館が人口当たり、あるいは面積当たりで、世界で上位に入るくらい多い国である。地方の動物園としてそのような形にするにはどうすれば良いのか、あるいは地元で根ざしてリピーターを増やす方向性にするにはどうすれば良いのか。ターゲットをどこに持っていかで中身が変わっていくと思う。ここの強みをきっちり洗い出した上で、どういう方向性で行くのかといった整理の仕方が必要になるのではないかな。
 - 到津校区では到津の森公園が大きな面積を占めており、校区として、安心安全な住みやすいまちづくりを園と一緒にやっていきたい。問題としては坂道が多く高齢者が行くのが難しいこと。子ども連れも上まで行くのは結構大変だと思う。また、駐車場の問題として、北側から入る際に混雑するので、その出入りをうまくしたらまだまだ集客できるのではないかな。到津校区は学校や病院など、環境としては良い。そこに到津の森公園があるということで、まだまだ素晴らしいまちづくりができると思う。
 - ボランティア人数は8月現在で133名いるが高齢化が進んでいる。いかに若い人を

増やしていくかというのが課題である。

- 飼育員になりたいという生徒と飼育員さんのお話を聞きながら到津の森公園を回ったことがあった。動物の生死、誕生の部分を使って、命の問題を子どもたちに教えてもらえたらというお話をしたときに、私もしたいですと言った飼育員がいて、そういったプログラムがあればもっと中学生も活用できるのではないかと思った。
- 長らく動物園は、動物が見られて楽しいという事に重点が置かれており、動物側の立場で何かを考えるということがあまりされない時代が長くあった。それに先立ち、欧米では「動物の福祉」ということが言われるようになり、もっと動物側のことを考え、動物を利用する以上はその動物たちが快適な環境にあるということを重要視しようという流れができてきた。そこから少し遅れても日本でもそれを言い出したのがこの何年かだと思う。
- これだけいろいろな情報が溢れる時代になってくると、生きている動物を檻の中に閉じ込めてまで見せる必要があるのかという議論も必ず起こってくると思う。それに対し、こういう理由があって少し窮屈かもしれないが、その代わり動物が快適になる条件をこれだけ満たしているということが言えないといけない。
- 資料の来園者数、売上を見たとき、率直な印象として、北九州市は全国で一番高齢化が進んでおり、特に若い世代が抜けている中で、来園者数は横ばいだと思います。資料によると市内の人が減っているということだが、ここに市自体の減少率を掛け合わずと減ってもいいのではないかと思う。その結果、相対的に市内が減って、市外が増えているところもあるのではないか。数字だけを見ると市の状況に対しては悪くもないのではないか。
- マーケティング、プロモーションというところで、X (Twitter) は、市内の集客施設の中では最もフォロワー数が多いようである。他 Instagram、YouTube では戦略が違うと思うが、他の県外の遊園地等と比べてまだまだプロモーションの余地はあると思う。人間の欲としてかわいい動物、癒される動物は見たいという気持ちはあると思うので、若者や今の世代を取り込むのであれば、SNS 周りはもう少し伸ばせるのではないかと思われる。
- ボランティアの中には菜園のプロ並みの腕を持たれた方がたくさんいて、採れたばかりの新鮮な野菜を動物たちにあげられるということは素晴らしい。